

コモチカタアシクラゲ



世界で2度目の
発見となった田
辺湾のコモチカ
タアシクラゲ

個体だけ見つけた。しかし、それ以降ずっと探れていない。田辺湾産の1個体は、属の特徴として1本の傘縁触手と触手背軸面に刺胞塊(しほつかい)を19

また、クラゲの若い世代であるポリプは見つかっていない。近縁種のカタアシクラゲのように群体をつくらず単体のものかもしれない。

(京都大学准教授)

久保田 信

21



コモチカタアシクラゲは、よく知られていない小さなヒドロクラゲだ。傘径は1・3ミリしかない。

1978年にパプアニューギニア産の複数個体をもとに、ブイヨン博士によって新種として記載された。それ以降、世界のどこからも出現報告がなく、2005年、河村真理子博士との共同研究により、世界で2度目の報告ができた珍しい種だ。北半球から初報告であることが注目される。

河村博士が1年間350回、プランクトンネットをひき、未成熟クラゲをたった1個体だけ見つけた。しかし、それ以降ずっと探れていない。田辺湾産の1個体は、属の特徴として1本の傘縁触手と触手背軸面に刺胞塊(しほつかい)を19

個持っていた。カタアシの名前の由縁である。

種の特徴は、傘縁副軸部にクラゲ芽を5〜14個持つっており、コモチの意味がこの特徴から来ている。しかし、原記載と異なる特徴が一つあって、写真にはつきり写っているのだが、口柄上に四つの白斑が存在した。新種にするにはあまりばつとしない特徴で個体差の範囲かもしれないが、正体は不明だ。

クラゲ芽が傘縁に多数できていたが、採集の時に本体が傷んでいた。クラゲは元気で一夜のうちに退化消滅することが多いので、そうしないうちに薬品固定して、腐らないように標本にした。これまでもこの仲間のクラゲの同定は、未成熟時に生じる傘縁部のクラゲ芽の有無によるところが大きい。